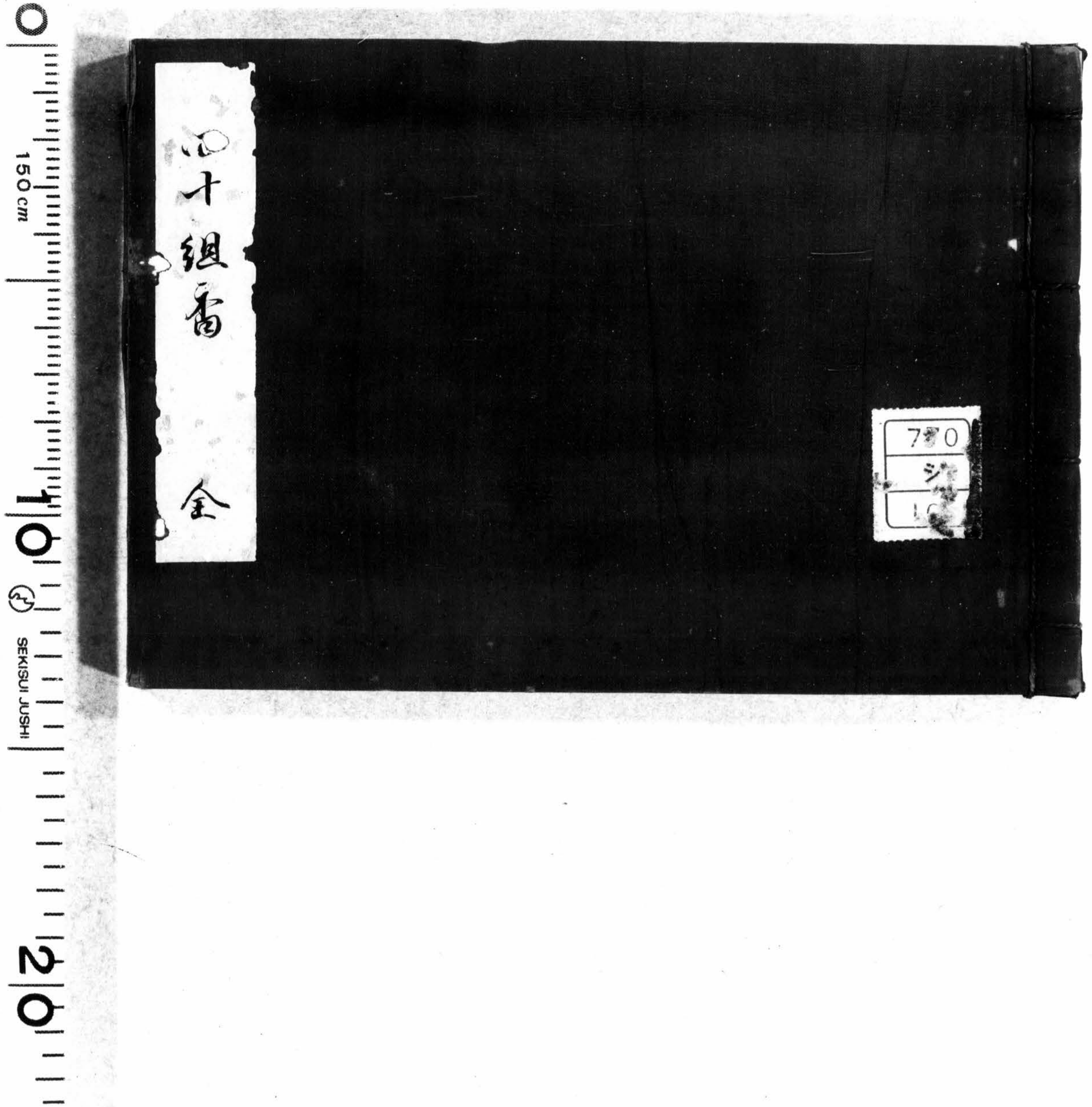

四十組香　全
770
シ
150cm
SEKISUI JUSHI

四十組

子日香 一 一裏

梅花香 二 二裏

梅烟香 三 四裏

雉子香 四 五裏

橘香 五 七裏

卯花香 六 九裏

五月香 七 十裏

郭公香 八 十二裏

山路香 九 十三裏

篝火香 十 十五裏

千種香 十一 十六裏

女郎花香 十二 十八裏

770
シ
10

昭24.7.13
184163
書

月見香 十三 二十表
名月香 十四 廿一表
望月香 十五 廿一裏
野分香 十六 廿三表
菊合香 十七 廿五表
竜田香 十八 廿六裏
時雨香 十九 廿九裏
落葉香 二十 卅一表
宇治名所香 廿一 卅三裏
源氏京極四町香 廿二 卅四表
乙女香 廿三 卅五裏
五方香 廿四 卅八裏
空蝉香 廿五 四十一表
四季恋分合香 廿六 四十三表
松風香 廿七 四十二裏
六歌仙香 廿八 四十七裏
難波名所香 廿九 五十裏
玉川香 三十 五十一裏
二見香 卅一 五十五表
陸奥名所香 卅二 五十六裏
替花月香 卅三 五十九表
ウ客香 卅四 六十表
杜律香 卅五 六十一裏
三種加客香 卅六 六十三裏
扇争香 卅七 六十四表
琴王香 卅八 六十九表
住吉香 卅九 六十九裏
三千年香 四十 七十一裏

合四十組也

○子日香　一

香四種　一　四包内一包試出ス
　　　　二　同
　　　　三　三包　無試　客一包　無試

右一二試香終りて十包を二包宛
焚出し焚て試に合せて札打
尤焚出し法前の如し

一二　千とせまて
二一　かきれる松も
一三　けふよりハ
二三　君かひかれて
三ウ　万代や経ん

如此二包宛ニ包を焚ひまはせて
一焚ひ宛焚出し候焚終りて記録
写取り計まむかくる位記紙の
面に焚する手も同り

一 二 三 ウ　番緒

子日香之紀

三　二ウ　二　二三　一三

名
白梅　千とせまて　かきれる松も　けふよりハ　君かひかれて　十

名
神楽　けふよりハ　万代やへん　君かひかれて　かきれる松も　千とせまて

名
呉竹 外題之 かすか山松も 為ぎりハ 影ぞひらて 万代やへん　六

記録の時ハ読て記録の如く書きれ

此香手有出候し和気を所知の

考

○梅花香　二

香三種

一　四包　内一包試ス

二　同　同

客一包　無試

右試終りて一二ウ七包打交焚包

此出
十二包アレハ初ニウハ除無包打交二包除キウヲ加入六包トミテ
此こウヲステテハ名月ノセニ十三焼キ可考
全く八中段ニハウノ本ヲ七名月ヨリ三下段ニ梅ト出ル又深
三種香ノこそ花月ヒトツニ出ル下ニ梅花出香出ノ用

のこさ五包焼出し試ヲ合て札ヲ

一ノ一両終り包の内一包とりて

焼出し一神ヲ此是ヲ札ニ川

此終りて記録ヲ写し出香ニ合

せ点かける

一右の香ニ此試ヲ此時ハ記の一炷

ニも小三種の通りを書出香を記し

一香終りて後記の一炷ハ先ニ出香を

記しうて出り其て夜のことを記ス

一の香三種出香ハ出香の下ヲ書也とい

二の香二種出れハ記の奥に分と云之

梅の花それとも見えす久かたの

あまきる雪のなへてふれゝは

一の香二種通れハ吟の中段に　梅の花と書

二の香二種通れハ吟の中段に　久かたのと云

一の香一種ても違へるハ中段に　夫とも見えすと云

二の香　同断　同　あまきる雪と云

二ノ香不當　一二ノ香も當ラす當ル一種ても當尉モなし名月云し

宇斗の所ならハ

神ニウ出テも所斗當ルハ[illegible]附ハ斗名月

中段ニ出ル所ケ右ニ[illegible]

段の所ならハ吟の下段の所ニ梅と斗云　同　なへてふれゝと云

但中段ハ右ニ同し

一｜
二｜
ウ｜

梅花香之記

一二ウ一一

名札　一二二一ウ夫とも見え　四

名札　一二二ウ一梅の花　梅

名札　一ウ一二二　一

月　日

○梅烱香　三

香三種

一　梅と名附二包　内一包試

二　烱と名附　同　同

三　香と名附一包　試なし

右試終り三種打交炷出し

炷終り試之合記紙ニ書出し炷

當りに点かくる也人炷二点香一人

炷三点二人より一点ツヽ如常様

記面ニ能く可考

梅
烱
香

梅烱香之記

梅　香　烱

名　梅　烱　香　一

名　梅　香　烱　全

名　香　烱　梅

月　日

○雛子香　四

香四種

一　四包　内一包試ニ

二　同　同

三　同　同

ウ　一包　無試

右一二三の内　一二二と三包ハ一結ひとし　三三一と三包ハ一結ひとし

右試済て三包宛二結ひ出交て

一包ツヽ三包ハ打炷出し一二二と出

ハ其のとし　三三一と出ハ雛子とし

ハつまなとも一結ひ三包ツヽて都合

一結ひとして一二三ウ〜四包の内へ入

七包として打まぜ炷出し試ニ合せ

記紙ニ一二三の文字ニて出付ウの香

ハ無点と出付　扨又本香ハ一二二出れ

ハ其の姫の文字に点かけ三三一出

れハ其二句きりたの如く点をかくるウ

ハ何香と其三香たの所に一字ツヽ出付れ

和の一二三ハ下の句の上にてウをとめ候

出付る歌如左

春の葉にうつるきのふの書よひよ
かのゝありし人をこそおもへ
尚記の所にて能く考へし

一 二 三 ウ

雛子香之記

二 一 三 二
春のにうつる乱次の書みて
おのゝありし人をこそおもへ

名 春の木 二 三 書え 一 三 三 一

名 乱次 二 一 三 書え 二 二 十

名 乱出 二 一 一 二 書え 三 二 八

此雛子香ハ東山義政公御時た
右の香合に出ける式にかへて後
組香に始めて香合の式とな
因しかれハ此とハいふとも右香合の
定めて考ふへし

○桜香　五

香四種

一ヲ神楽として四包　認内一包試ス

二ヲ如月として四　同断

三ヲ弥生として四　同断

ウヲ花として三包　試なし

右試終りて本香十包打交二包

被十種炷出し　二炷ツヽ一名として

名家紙ニ書付出之名目左の如し

一一ヲ神楽　二二ヲ如月

三三ヲ弥生　ウウ　色香

一二　白雲　二一　白雪

三一　木陰　一三　木外

二三　横雲　三二　枝折

ウ一　曙　一ウ　夕べ

二ウ　落花　ウ二　見花

三ウ　餘花　ウ三　夕花

右のほかハ全て二炷目ハ外して

書付へし　ウの外して記録ハ其

小記紙書左のことし

客香一種出れハ
なかなかに咲るも見えし乃
山のかひよりみゆるしら雲
客二種出れハ
おしなへて花のさかりに成けり
山のくころにかゝるしら雲
客三種出れハ
みよしの山辺に咲る桜花
雪かとのみやあやまたれぬる
花枕それと咲るもあり先ハ記紙
さくら出されハ 桜花の両三香

一 二 三 ウ

桜香記

一 二 ウ 二 一
二 ウ ウ 二 三

名 白雲 如月 色香 添生 下紅 三
名 紅花 如月 下紅 添生 白雲
名 白雲 紅花 色香 如月 下紅 十
名 如月 白雲 色香 下紅 白雲 一

みよしの山辺に咲るさくら花
雪かとのみやあやまたれぬる

月 日

○卯花香　六

香四種
春として三包　内一包試ス
夏として三包　内一包試ス
垣根として三包　客試
卯花として一包　客試

右試香二種済て春夏の四包に
打交内一包抜て三包にかきねと卯の花
の四包と一所に合せて七包焼出し次
かきね三包ハ試なしの新香にて
出す卯花ハ客試香也一種なれ
ハ春夏ハ試有て名のる如く
[illegible]出たる記録にハ夏二種出れハ

本香の内に新香出春二種出れハ
奥にかきくへし歌
わか宿の垣ねや春をへたつらん
夏来にけりと見ゆるうのはな

卯花香之記
春
夏
垣根
卯花

名
かきね
かきね
うの花
春
夏
かきね
春

名
かきね
うの花
夏
夏
かきね
かきね
春
三

名
かきね
かきね
うの花
春
夏
かきね
春
卯花

新宿れ垣ほやまぼ満つん友きふれつと　こゝろ卯花

月　日

右のことく全の人の聞の中ハ卯花

と書へし

聞書、有記の奥に書　一行二行ハ又全之大人数の時記の奥に書也
いつく一行ずし小人数の時ハ奥書の二行本書之様の留へ

○五月香　七

香四種

一　四色　内一色試ス

二　月　日

三　月　日

客　二色　試

右試香終りて一二三九色とまぜ交

二ツに分けて跡の四色、客香一種

を加へて五色として聞へし　試香ハ

色、客香一種を加へて六色とまぜて

二色とり聞けハ内にウ香あり試聞

客初後に二種出るとこれハ花橘

袖の香と出へし　初一種計と聞ハ

花橘と斗書へし　和ハ一二三の

文字にて書付出し全の人々は作の
下枚の紙に五月香と客二種書出しハ
記の奥に前と一首と客一種書れハ
出香の中に花橘れ上の句計出し
二種おそも一首の前ハ前の方計
出へし　但記の二種ハ本香と先に
書し客を記紙と見合前り計出
不出ハ不出と印記の面にて能
考前記録有へし
五月待に取るもの香のかほりけハ

此出
五月香ノ点人々にて在出時はハ後ニ二種アルハ花橘ハ出不出ハ不出と
出るハ

むかしの人の袖の香ぞする

一
二
三

五月香之記
ウ

一
二
三
ウ
一
ウ
一

名
一
三
ウ
三
一
一
袖の香
五

名
一
三
三
ヴ
一
花橘
袖の香
五月

名
三
三
三
一
ウ
二

名
二
二
一
ウ
二
花橘
二

さつきまつ花橘の香かほりけは
むかしの人の袖の香そする

月
日

○郭公香　八

香組ハ各常ノ如ク定メタル香ニ
一炷ツヽ打出色紙ニ歌ノ名香ニ
付香出ヘ是ハ香本請テ香ノ
本紙ニ入墨ニテ染色の紙ニ入
くの名紙出付名香の香一包中ニ包
前ニ置くと一炷ツヽ炷出へし
又打ハ鳴出るハ見て香と出て
出候打つるハ記録ニ点無
打てあるハ早速記ヘし其後

連中の内一名香出ヲ打つハ初ヨク
出つる所先と記ヘし出つる所一三内
前より名紙へ出ヘし記録ニハ
之なり

[illegible]

一	義貞（名）　初の香出	五	尊氏（日）　初る
二	正成（日）　初るを	六	義詮（日）　田面
三	長年（日）　池水	七	義持（日）　遠京
四	高経（日）　かへ	八	義勝（日）　千代鶴

郭公香之記

十八九二一三四五七六

（名）義貞　五

（日）正成　四

長年 日 八
宗縄 日 七
高氏 日 五
義詮 日 十
義持 日 七
頼備 日 八

月 日

○山路香 九

香四五種

行やて山路くらしつ时鳥
いま一声のきかまほしさに

右前組香ニ切二色宛ニ認ル一包て
試ニ出ス試香ハ種ゝ出香ハ種す
定組ニ出スへし試合記紙ニ書付出候也

又右試香ハ種々又元の出香の包紙ニ
入置ハ試ニ出る種ゟかなり右ハ包ヲ
交又出し是今一声のきかまほし
さふといふ前の思ありて記録の面
へそつ香

記面始ハ種ゟ時鳥の香斗ハ二
点ツヽ記ハ種ゟハ三点ツヽ但し始時鳥
ふ南ハ記斗ハ二点ツヽ和香も始ふ南ハ
一点ツヽ南方 南りハ二点ツヽこそ和せは
但記録認やうハ前ゝ有と同しやう
は式写し

山路香之記

二一三五四
三二五四一

名
一二三五四
三二五一四

名
二一三五四
三二五四一

名
四三五一二
一四三五二

名
二三一四五
三五四二一

月日

十一　全　四

○篝火香　十

香四種
一　玉鬘　三包　内一包試
二　源氏　同　同
三　琴　二包　同
ウ　篝火　一包　試なし
右之種試済て本香六包二種ツヽ
組合せ之打交吟試して合て名を
紙に書付出　源氏玉鬘　琴枕　玉
かつら源氏　意烟　琴篝火　夕暮

篝火 香之 記

源氏 玉かつら 琴

玉かつら 常夏 篝火

玉かつら 源氏 琴 篝火

名 琴枕 夕霧 忘烟 二

名 琴枕 忘烟 夕霧 六

名 忘烟 琴枕 夕霧 二

記録是ニ准ずべし

○千種香 十一

香三種

一の香 四包 内一包試

二の香 三包 試なし

客香 一包 試なし

右一の香試終りて七包打まぜ
炷出し二客の香ハ無試十炷香のご
とくにして炷き出するを二の札を
うち後の出る客札うちなり一の香
計ハ試ありしハ一の札をうつへし全
の人ゟハ第一着我此のかたに出す之

一の香二種のうち客の上句をかく紙
二へ一二の香の三種打まはりは下の句
計出客香の打まはりは一種を出一二の
香とも三種一種の打まはりは点数計
出へし 打紀の箇にて知点へし
一種の方にのみの如し

古今集　秋

みどりなる一つ草とぞ春はみし
秋はいろいろの花にぞありける

千種香之紀　一　二|　ウ|

ウ　二　一　一　二　一　二

名札　二　二|　一|　ウ　一|　一|　二|　四

名札　二　ウ　一|　一|　二|　一|　二|　みどりなる一つ草とぞ春はみし　五

名札　一　二|　ウ　ウ　一　ウ　一　一

名札　二|　ウ|　一|　一|　ウ|　一|　ウ|　みどりなる一つ草とぞ春はみし　秋はいろいろの花にぞありける　全

名札　二||　ウ|　ウ　一|　ウ|　一|　一　千種　五

名札　一　二|　ウ　一|　二|　一|　二|　秋はいろいろの花にぞありける　五

名札　一　一　二　ウ　一　ウ　ウ

月　日

又一の香二包内一包試ニ二三の香ニ包
宛不試にして七包打まぜ焼二三紙
不試の札として一の香紙出札紙
うち一の香聞たりて和歌之両句ハ上の句
計出二三聞て一人たり不当ならは
下の句計出不残聞たりならは和歌一首
を出如此焼も有と又家傳記
にて不存

千種香之記

二 三 二 一
三 二 三

札名 二 三 三 三 三 一 和歌一首出
札名 二 三 一 二 二 三 三 下の句計出
札名 二 三 二 三 二 二 一 上の句計出

如此聞たれとも上の句ハ用ひもする
へし下の句又一聞ても出して二
三ニ不残聞たりとも不出ならん

○ 如卯花香
香六種

一とゝとうして　二包　内一包試ス
二とゝみうて　同
三とゝなうて　同
四とゝへうして　同
五とゝしうして　同
六ツウうして　一包客

右試香焚終りて出香打交へ
の焚様乙同面五て客香を添へて
二包づゝ焚出し何様の香なりとも
出る香ごとに名の五句に合て一句
ヅヽ書付出候ハヽ記録ニハ本香の外に香の
一ツ書出し本香の外に合て一句ヽ宛

ざうけ様の時も何様ニ上端かく
ると合点此時の出香の前後を
考て書付出候　名目合ても前後
違へハ当りにならず又外名目不当ハ
ても客と前後合ハ客計の何様なり
本香に客の字ハ出て一句の様に出
し外出わかれたる出様ニ出れハ右に出す
名目もウの字有一句出候故
当記録の通りて能〻可考

女郎花香記

小倉山ミねたちならしなく鹿の（客）
へにけん秋をしる人そなき

名　客　なく鹿の

名　客　へにけん秋を

名　なく鹿の　客

名　客　小倉山

月日

此香ハ古今物語の在所
朱雀院の御時女郎花合の時よめると
いふ五文字を句のかしらにおきて、よめる
紀つらゆき

小倉山ミねたちならしなく鹿の
へにけん秋をしる人そなき

○月見香　十三

香二種
月ニして　四包　内一包試
客ニして　三包　無試
右試香終りて出香六包打交除
き三包ハ焚名目如左
月月月と出ハ　十五夜と出　月
月客ハ　待宵と出　客月月ハ　十六

夜と云　月ウ月ハ　水上月と云
ウ月ウハ　木間月と云　ウウ月ハ
残月と云　月ウウハ　夕月詠と云
ウウウハ　雨詠と云

月見香之記　月　ウ

名　月月ウ　二
名　夕月詠　一
名　水上月　一
名　十六夜　二
名　木間月　叶
名　残宵

又
名　残月

名　ウ月月　真名月
名　ウ月ウ　残宵
　　ウ月月　此云
記録右之通ニも云〻　当座何之香も有之時は之に准へし

○名月香　十四

一　月として二包ニ認　内一包試
二　ウとして一包ニ認　無試

右試香終りて出香二包打交炷出候
へし　試ニ合せ名所紙ニ書付出候
ニも祢常の如し　右二包之内打交一包気
少も有間敷ニ候へし
きろく左の如し

名月香之記
　月
　ウ

名 ウ
月

名 ウ

月 日　　　　出香 何某

少々二種に様々書記録
名 月 ヴトヲ(出一ウハ二包)

○雪月香　十五

香四種

一香 四包ニ認　内一包試ス

二香 四包ニ認　ワリ

三香 四包ニ認　ワリ

ウ香 一包ニ認　試なし

右焼ニ一の香二包 二の香二包 三の香二

包右六包打交焼出候ヘし 但ミなの如く

結び合て打交出ヒせり名目ニ合せ付

出候

一二の香と　桐坂のと云

二三の香は（右打交後合ニ）　雪の清水云

三一の香は　うけ入て云

右終りて 一二三包残りうち打交

一包残ウ香とかへ二包焼 但し一二

三ニ内とウあれハ今や和らんと云

ウと一二三ニ内あれハ雪月の詞と

云 但三ウとは今やいらんと云ウ三と雪月の

詞あり言を小云とす

是ハ家ノ方寄ス

尚記の所にて能く可考 記録如左

重月 香の記 一二 三一 二 三 ウ 三 三ケ

名 お坂の 冥の浮の うけ之て 今やけら之 重月の名 二

名 うけ之て お坂の 冥の浮の 重月の名 今やけら之 四

名 お坂の うけ之て 冥の浮の 重月の名 今やけら之 重月

月十

右初の三ツ浮ひ合ても香ハ二色記より

て打交らひ合候へし 十三香定る

行当り何寄り 傳に前後の其付出之

故の一二三の香も 傳にても下さても 其付

揃出し 双行より 二点 行行より 一点之

出香 記録に前後ハ出候は不及前後出迄不申候得之

出香 一二 二三 三ウ 後ノ出香

記之て 冥の浮の 今やけら之 行アタリ 行アタリ

○野分香 十六

香四種

一ヲ野分として 三色ニ混内一色識ス

二ヲ夕霧として 三色ツゝ混ル

三ヲ明石として 三色ツゝ混ル

ウヲ胡蝶として 二包ニ混 識ルし

右香三種ヲ以て 出香十包打交て八包

炷き出し 炷出之上 炷ハ札にて 記録

そもきてあり　札の時ハ野分二
の札と斗ゆふきり二の札と斗あ
り　三の札と斗ウニウの札二枚
斗之記紙の時ニハやくり名月へ
野分夕霧ニかりし仲秋と出へし
時雨りてきるくニ名月と長枚ト出
し　名月たのこるし
四羽の当りハ　野分ト出下ニ長枚ト出
三羽の当りハ　夕霧ト出下ニ長枚ト出
二羽の当りハ　時雨ト出下ニ長枚ト出

一羽の当りハ　荻葉ト出下ニ長枚ト出
すかりハ斤当りの子之一種なれハ仲秋ト出下ニ長枚出
才当り斗ハ　村雲ト出下ニ長枚出
無の当りハ　村雨と斗出へし
尚紀録の際ニて能く工夫有へし
記たのこし

野分香之記
野分　夕霧　時雨　仲秋

野分　夕霧
野分　仲秋
時雨　時雨
野分　夕霧

何某
小萩　野分　時雨　仲秋　三羽
野分　仲秋　夕霧
時雨　野分
夕霧

日 白菊　霜　仲秋　霜　仲秋　昭君　霜　夕霧　夕霧　二羽　昭君　六

日 水仙　霜　夕霧　霜　仲秋　昭君　霜　仲秋　全　夕霧　霜　八

日 玉椿　霜　仲秋　霜　昭君　仲秋　霜　昭君　行高　夕霧　村雲　四

日 老松　昭君　仲秋　霜　仲秋　夕霧　昭君　霜　霜　一羽　刈萱　二

日 緑竹　昭君　仲秋　仲秋　霜　霜　昭君　霜　霜　乙女

日 早梅　夕霧　霜　夕霧　仲秋　霜　昭君　夕霧　霜　仲秋　一

月　日

此書
古代ハ札ニ早組甲組ニモ名香を認有之　近頃ハ書ニ立
此文句之内ニ記附ハ菊合香也

○菊合香　十七

香二種
　秋風　四包　内一包試
　白菊　三包　試なし

右にて試み済りて　試の本香六包
打交　内より二包抜て　試る四包ニ
此名家紙ニ書付出候　記録の下
ニ二種の交り出るによりて　名
何り如左
菊多く出るにハ　花と斗　秋風多
く出るハ　波と斗　両種等分ニ出

しるハ菊と斗記録ニハ家紋斗て出
香の次第ふよくたとへハ秋風白
菊秋風と出る時家の秋風白菊
の儀ニ斗分て出香常ゟ交て
点印かくる

秋風　ー
志ら菊　ー

菊合香之記

一三四
秋風の吹上ニたてる白菊ハ　二
花かあらぬか波のよするか　　波

名　秋風　白菊　秋風　秋風　波

名　白菊　秋風　秋風　白菊　一

名　秋風　白菊　白菊　秋風

記録　菅原道真

古今　秋下

おなし　御時せられける菊合に
すはまをつくりて菊の花うゑ
たりけるにくはへたりける歌　ふきあけのはまの
かたに菊うゑたりけるによめる

すかハらの朝臣

秋風の吹上ニたてる志らきくハ
花かあらぬか波のよするか

〇竜田香　十八

香四種　客　十炷香ヲ組テ
一二三の香三包宛客ウ香一包目当
右十種の内先一ノ香二包二ノ香同
三ノ香同合テ六包ニウ香一包加へて
七包打まぜ炷出候へし　炷中　十炷
香のうち先ハ二種ツゝの追ひ
炷となる　右炷終りて　記紙
斗付出して一二三ウ　名目ニて出
し　名目左の如し

一ばんに出る香の名是香ノ一ハ初と
一の香ハ　立田山と書へし
二番目出る香の名
二の香ハ　紅葉と書へし
三番目に出る香の名
三の香ハ　落葉と書へし
客の香ハ　唐錦と書へし
右の内一ハ先一二三とやかり一二三
の名字也て斗ウ斗とかくし記と斗
候へし
右七包終りて跡一二三　三包ニ内ホ
交一包宛炷出候　炷終りて跡七包ニ内
此香何種目ノ一　ハ　ハ二跡

の七種の内一番目と七番目とを呼ハ雲
一番と七番の文字のかくしに立田山と云
次に出る香伊呼ハ二ツ也紅葉と云
へし又ハ次ニ出るを一ツと出ハ
常盤と書へし抽記一種ニ名目有り
左の如し

始二種立田山と記一種月香と呼ハ
時雨と書へし
同紅葉と記月香と呼ハ
雲と書へし
同常盤下記一種月香と呼ハ
色と書へし

右後の一種と始七色ニ内二種と同香
を呼て又名目有始立田山紅葉常
盤いづれも右の如し
三種の何れにハ　秋の錦と云
二種の何れにハ　秋の山と云
あたりの香にハ　もみぢと云
右當りの名目ハ左の古歌によつて
名有る所如左
秋風の梢吹しく山さえて雨きに
折人もなき錦
いく木とも思ひも見えぬ秋山の紅葉の
錦よそにたてれハ

かゝみ山山かきくもりしくるれともみちあかくそ
秋はみえけり
此一首の哥に時雨紅色の名目有りとの哥
かゝみ山は高の山にて今くらへは京からに
近江なるらん
此哥の心を案て一二三ウの名目は
此組香の大意とも何れ記の奥に志るして
令知ものなり
右此組香にて札にて此にも出し札にて
此ときハやゝり一二三ウにて始七種と
此後の一種も一二三の札にて一枚ずつ
又名目記録ニて志るしむへし 筆
者能く此味を付ゆへ初心の一座抔
にハ却て出さなき書きて初心の人
抔ハ知るまし 此組香の出所能く合
点の人筆志るすへし たゞ大札記紙
のすハ一座の出香によりて記へし
尚記の所にて可考

新田香之記

一
二
三
ウ

二三一一ウ三二 時雨

名 一二（高山）三三（錦屋）二一（高山） 時雨 秋風 全

名 一二三二（常盤）（錦屋）一三（常盤） 色 紅葉

名 一一二（紫宸）二三三 錦（唐） 雲 秋の山

右　一二三二一三　唐錦　色

唐錦たつたの山も今よりは
もみぢながらに常盤ならなん

月　日

○時雨香　十九

香五種

木の葉ふる霜ハ時雨かとそ聞ゆ
時雨ふるとも志られせぬ詞
木の葉を二ツにて組ミの句
一の香ハ　木の葉ふるとして　二包
二の香ハ　霜ハきこえとして　太
　　同　四
三の香ハ　かくときこえとして　太
　　同　四
四の香ハ　時雨ふるとして　太
　　同　四
五の香ハ　時雨せぬ秋もとして　右
　　同　四

記ハ包識

右試香五種組ミて五香五包出
交雑出し　聞組ミて試ミ合名
可依　香出候して聞常乃
出し　相記録の通り須知出し

木のくる　菊ハ少かく　うちとなる　時雨する都も　立いれ時も

時雨香之記

時雨山路も　かくてたに　菊ハ少分

木のくる　時雨おたも

名家　時雨山路も　方にかな　時雨時雨も　菊ハ少分　叶

木のくる

名家　木のくる　うちとなれ　時雨時雨も　時雨山路も　菊ハ少かく　一

名家　このたる　菊ハ少かく　うちとなれ　時雨山路も　時雨時雨し　一

月　小

○落葉香　二十

香三種

雲として　三包　試香なし

嵐として　三包　同

落として　一包　同

右初に雲三包　嵐二包　ありまぜて

出す　三種ともに二種まで出分けは試と出る

極ゞ二包ばかり一包まじり　香数加へて

二包ながら雲出れは記録の奥に落葉と出

嵐ばかり出れば香の下に嵐はなく立寄りの

人は松かぜ山と出る　余の人には出香の下に

落葉と書へし
歌に
うちわたす雲に嵐の声すなり
あるゝ時雨のかつらきの山
雲｜
嵐｜
麓｜

落葉香之記
雲 嵐 雲 嵐 雲 ウ
名 嵐 嵐 雲 雲 雲 ウ嵐 かつらきの山 四
名 雲 嵐 雲 雲 嵐 雲 ウ かつらきの山落葉
名 嵐 雲 雲 嵐 雲 嵐ウ 一
月日

此炷出すこと段々炷出来出す座
雲六包嵐六包ウ一包ニシテ始炷三包嵐二包トリ末炷ニ炷一包
二種ト三種ニハカリ三ト加ヘ六包内一包除キウ香加ヘ六包ヲ炷也
雲二種出テハ出香ノ下ニ名ヲ書ス嵐三種出テハ記ノ奥ニ名ヲ書ス客ノ内ノ人ハ
落葉炷ノ中段ニかつらきの山ト書全ク人ハ落葉ト書ス外ニ加十己
又雲六包 嵐六包 ウ一包として
始雲三包 嵐三包 とり末まぜて 一包
とり五包炷きて始のこらし 出所にて
客方にかへし 此二種の香と二種の香と
遠名ゝ記し 一炷ゝきり炷終りて 本香
斗記録に写す 後六包に客ハ始のか
香ニアクテ 正に炷へし 扨試六包ヲ末
まぜ一包とりウ香加へて 六包炷終て
札後のかいに 雲六種出れハ出香の下に名
を書すへし 六種出れハ記の奥に客の

廿ウ當りの人ハ一ツ〳〵よみ山と
云合の人〳〵ハ一ツ一角廿枚の外
茶と云二ツハ上枚斗 出し
右名香ハ何連も気如や出聞
う行く記ス〳〵に云相初の見

○宗作名所香　九一

香五種

一種ハ小鳴澤として二包 記ハ一包試

一種ハ　山吹澤として　右同　三包
一種ハ　橘姫として　右同　三包
一種ハ　扇芝として　右同　三包
一種ハ　鏡山として　右同　三包
右試香三種ハ終りて本香十包ニ交
内ゟ一包とりて炷出し聞て記
紙ニ書付　本香十試ニ合せて〳〵ハ
二と書〳〵ハ山吹澤と三と書〳〵ハ橘姫と
四扇芝と五と書〳〵ハ鏡山一と書〳〵ハ
小鳴澤と書付る也　二包ニ而一座

此香ニ今一包焼出候を
追加と云出香ニ本香部
出し聞紙如此

小落葉一　橋姫一
椎本一　扇芝一
宇治名香記
朝日山一　紅葉山一
追加　山吹瀬

名　小落葉　橋姫
名　橋姫　山吹瀬
名　朝日山　山吹瀬

月日　出香　何某

聞紙名香添之

○源氏東西四町香　二十二

香四種ツヽ組也

一種ツヽ　東　紫の香ト名付　置包ニ懐
内一包ハ上ニ紫ト書付　試香之

一種ツヽ　西　女三の香ト名付　同
内一包ハ上ニ女三ト書付　試香之

一種ツヽ　南　花散香ト名付　同
内一包ハ上ニ花散香ト書付　試香之

一種ツヽ　北　明石の香ト名付　同
内一包ハ上ニ明石ト書付　試香之

又一種試なし　是源氏かり客と

名乗大概常の如く頬分
(一)出香ハ何れも十包ニ記録
香記もやうハ左点印ハ平点之

源氏香四町香之記

紫明花源三紫紫三明明三花花

名札　明花花源三三紫紫明紫三明花　七

名札　紫明花源三紫紫三明明三花花　全

名札　紫明源三紫三三明花花紫明花　三

月日

○乙女香　二十二

香四種

一香三包ニ記　試

二香三包ニ記　試

三香三包ニ記　試

客香一包ニ記　試

右十包先別くニ置て其三包宛
結ひ合せ三結ひにしてかり文
て内一結ひの内より一包ヲ又一結ひ
の内より二包ヲ客香ト入四包ニ交て

焼出候也 組との内ハ二炷のものハ
菓の上一炷究の神の出香を先試て
後段々焼也 次ニ又一くるりの内
より二炷ツヽ 又一くるりより一炷出
す色ハ其炷交焼出候次ニ又一くるりの
中より二炷ツヽとハ始一炷ニ出
三色一包ハの くるりの内ニ一炷出
すなる中よりのまなる也 又一色ハ
始二色ニ一包出る香の為也組
此内ハ神の二ツ炷 秋と記候二ツ
也

中宮と云 秋好中宮のうちも 一ツ有候を田始ニ焼
一 あ 又一種有候炷て 是ハ後ニ二色ありて
一色添りる 是ハ秋の九炷の内何しも焼
始の内也
て焼出也
此一種ハ先ニ本香段々後ニ組との焼也
右一種ハ出香ある人明かの上と定也
不出人ハ神宮月と定也
秋の出香の京の宮と出組ニ出し始に
も宮と云是ハ秋の五種くりこ
又は京風上宮二種とも焼後の秋の内
焼損ねれハ次ニ宮と出 此宮ハ記録のうち
に出へし

後ての呼たハ此時ゟ何某と云ふ
初呼返さるハ名残の松と云へし
哥如左
いつも長清ては秋宿の
子葉紅風のたてもみよ
風ちるより人ちはいと書の名残
名残の松とうけてこそみよ
語り十種香ありこそし　扨これ呼
一　記録ノ家ハ時先の四種と二ツ
方紙并ノ請ゞ記ハ一ツ宛ゟ先子出る
べし　尤も手段家ハ一ツ紙する事へし

後しの呼ハ家々源氏と呼　又は源氏と呼
是も同家行ちに如しり
後の家様ハ一ツ宛紙香の傳も立回
始と云先ヘ二ツ　右　かくるを同傳に　秋と
記録の二種ハかくこ云ふし　と　たとへハ始の
記録置と後の向ふて金ヘハ其所の名
家紙の傳ふ一二三ウの書し　と付け
て出るを一　とうく　記紙十種香れ
云るも呼十　始ある後ある呼録
一包呼以上十包あり　記録ハ始りの
一包の文字を入ヘ是　別家れ下に書出

香之試へし　右此組香ハ難解候
ニ付記如左

乙女香之記

一玄　三友　二秋　三　二秋　秋くれは我宿の[illegible]

一玄　一源氏　三　一　立田姫　二　紅葉は風の[illegible]

名　紫　紅葉　秋好中宮
紫　源氏　中宮　立田姫　秋　秋くれは我宿の[illegible]
紅葉は風の[illegible]

名　紅葉　高姫　中宮
紫　源氏　秋　中宮　中宮　[illegible]の松　一

月　日

点かけやし

一　紫ニ紫と二色合ハ秋好中宮の紫也
紫一色ニ入立田姫と出し点かけやし　たとへハ何成
紫何成紫何と立田姫と合点かくるなり　秋ハ初
一色入ハ紅葉之以二色有之ハ初の一炷と秋の
二炷と合ハたとへハ何連の紅葉何の秋好中宮何の
秋の初めと合点ん秋の内なれ共出る香を二
色秋の中宮とゆうて　二ツ合へハ返一炷にて名と合
是ハゆうの下段の本の上ニ記之の文字也　又何にて秋の中宮の何にて秋の中
宮の何にて記之とゆうハ則合点之ウにて紅葉と
ゆうて点とあらハウととふ儀ニウと斗記也
右此常姫四種ハ紫炭ウと定之次の三種の
香ハ秋の三種と書へハ三つりく此点名目入るの
して　兼紙にてかくし

○五方香

香四種
一の香　六包内一包試ス
二の香　同　同
三の香　五包　同
客の香　一包　無試

右三種試終りて先一二三の香
二包宛ウの香一包六包ニ一包合テ
七包を交なと炷試ニ合て札を
應し炷香一二三八包ニ二包宛

結ひ合ニ結ひなと打ませ一結とり二
種炷なり炷終りて記紙ニ書付
出候結ひ合やう左のことし
一一トニハ東とし　二二トニハ西とし
三三トニハ南とし　一二トニハ北とし
右二種炷て一字ニ書出之し記
紙ニしるし札打時ハ東西南北試
一二三ウそ記ス一ツれ打様ニ書し
記録ニ客香ハ中央と書記六種ハ
二行ニ書へし記ノ二種ハ東西南北

此一字より上の七種ハ尋常の
ことばの二種四季の風物所尚
の長き始南北ハ此の下ゝ北の字
の上句計と出後尚ハ下の句計
半羽方南北ハ字一字を出し東
西南の三ハ南ハ東方の字一字宛
半之ハ南ハ不半
　東方の字　東
月も日も先出初る方なれハ朝夕
人の打詠めし
　西の字
松風も入日の空も詠めれハ
西にかたふく嶺のしらくも
　南の字
玉章のしるし人里の松風にたゝるゝ
むらしくれの声
　北の字
こほりしも冬の氣色のかはりなく
いつくるとしもそむくなき夜の
　中央の字
むかしより動きなきは里ハ唯我
国の空中ぬけり

五方香之紀

名札　二三一二　一ウ三　二　二

名札　二三一三　一ヴ三　西　梵也今日の元も穢の多し　何れハ愛かさるなり　全

名札　一三二一　二ヴ三　北　何れハ勇くかさるなり　四

名札　一二三ウ　二三一　南

名札　三ウ一二　十三二　東　三

右此紀ろくの西うれ能して考

右五方香ハ十種香ニ一二三ウ五種増
加へて後京極ウ方の相分ちて
組出也此組ハ妙法院宮御作之由
把ニ有く
新紀之儀未世間ニ其ゟしるも
非ん傳る此ハニ不知者也

○空蟬香　九五

香四種
空蟬として　四包内一包試

源氏として　三包　試なし
小袿として　二包　内一包試
軒端荻として一包　試なし
右試終りて　出香　源氏　空蝉小袿
三包ツヽ打交　焼出し　右終りて
次に空蝉二包之内一包を取り香軒
端の荻入て　又源氏を加へて
又三包打交　焼出すへし　此ハ空
蝉をかくすと見へし　記録　本香にハ
空蝉を隠せしと云へし　右終りて　空

蝉一包源氏一包残りたるを打交
一包を焼出して始に合　空蝉出たれハ空蝉
出たらハ初の包を出香の下に出し源氏ハ
出たらハ次の包を記録の奥に出すへし
記録に出す時にハ空蝉と書へきにハ
本の名を書へし　源氏と書へきにハ
本かくれたと書へし

歌
うつせみの身をかへてける木のもとに
なほ人からのなつかしきかな
空蝉の羽におく露の木かくれて
忍ひ忍ひにぬるゝ袖かな

ことかなのごとし尚記録の面に
然て考如左

宇治　源氏　〃
小倉　新古今の秋　〃

宇治　蝉　香之記

小倉　源氏　宇治　新古今の秋　源氏　源氏

名　小倉　源氏　宇治　ひさく　新古今の秋　源氏　あかれ　全

名　小倉　宇治　源氏　源氏　ひさく　新古今の萩　木綿て　一

月　小　出香　何某

記録是に准ずべし

○四季恋分合香　廿六

香五種

一　種は春と名付　二包、試内一包試ス
一　種は夏と名付　右同　同
一　種は秋と名付　右同　同
一　種は冬と名付　右同　同
一　種は恋と名付　右同　同

右試済りて出香ハ五包打交て一包
ヅツ炷へし　試の包ハ除ク也
聞書ハ四季恋ニテ己ノ名付て春ハ

青葉ハ赤 秋ハ白 冬ハ黒 恋ハ紫ニ
して出香の色紙ハ一色黄ニして用
ゆへし 記録紙ハ常ニ替り鳥子
二枚を継合して金銀の泥絵ニ四
季の草花を絵書して本香紙
一種ニして試ミ合 名香紙ニ書付
出すへし 本香ニ何れも点かけ
させて出香の次第ニよりて高座を
継紙を出して歌ハ詠むも其の歌ハ
よりて勝負を定メ則右の記録ニ入

合へし 本香其名れハ其の内にて
題を以て出すへし 四季 先ツ 雑次
部ハ人数に應して 通り出すも又
撰ふも定へし
右一二の勝負ハ 秋より吟味して
又よみ歌も勝れハ取りて不及
ニかつハ勝歌ハ 又三四の何れもいハ
本香ハ吟味有りてよみ歌勝れ共
又よみ歌ハ勝れとも 本香何れも
されハ双方持と決し給ふ石ならも

前も三種香も二香ハ種聞ニ
おゐて候也此組香ハ
後陽成院勅作なり　尤前香乃
引香共ハ二炷して勝負を定む
へし　尚記の通ニ能〻須知也
候し　記録のごとし
右此式中候分　上ミハ専聞也し
三段ハ此香候ニ　上之御組の賞
月花の式といふ也　有此式〻
雨夜ニ立て此組香なりと伝来候

撰四季香合志候　常三十組の
四季香合出せる事也へし
　春―　秋―
　夏―　冬―
四季意香合香之記
春　湖上霞　梅薫袖
　雪中鶯　花遠目
梅薫袖
よみ人　上句―
下句―
雪中鶯

春　名

夏
上句―
下句―
花遠日

夏　名

秋
上―
下―

秋　名

冬 上下 湖上霞

月 日

名

○松風香　廿七

香四種

松風ニて八包　一の香罒包内一包試ス　二の香罒　同

時雨ニて二包　試香なし

落葉ニて一包　同

右時雨の内ニ松風罒包ニ内一包

引罒包ニ交て三種此時雨二包。

松風の一交るゝ二交るゝ也此一の香

とのハ三ヶ路と云　二とのハ雌中の

後と云次ニ一二を交て二包此交

それハ一を河内松と云二を浮木と云

松風香ニ客を交て罒包此交それ

やより松風何交ハウと西れて云

けのいつれハ此の外に衆香云

身をこえてひとりかされは山里に

きりしかにるまつるそふく

和香出客出ハ琴去松風の

聞えて吟

松風一し
二し

松風香之記 聞香出し 出し

松風一 松風一 ウ

聞 聞 松風二 松風二 松風二

名 引露 聞 海苔 松風一 弐 三香全
聞 濱木 松風二 松風二

名 聞 聞 濱木 松風二 外 三香四
聞 濱木 松風一 松風一

名 聞 聞 濱木 松風二 松風二 一
松風二 海士 松風一 ウ

月 日

〇六歌仙香 二ヶ 弐八

香六種

一ノ香 五包　二ノ香 七包

三ノ香 五包　四ノ香 七包

五ノ香 七包　ウ香 一包

以上三十包 内試香なし

右六種ノ内一二三四五二包宛九十

包打交焚出ス右二種の十炷香の

如く書へし 初メ二十一包の香

焚出交テ包ヲ定ムウ番 包く

六首として みやすきも内一首とう路
むう姓の何程めと自書とゞ詠たるハ
姓の一の書と自書を詠ハ歌みとして
書二とけ書を詠月やけりぬとせ
指六歌仙の歌て人合彼一種ゑけ
とにかハ色ヶ落つと 其出書の万
六歌通一首を詠ぬらう人も歌一
そかく十路との路を通して六歌
仙の名をとおさ十し 六歌仙の歌如
れ

僧正遍昭

あさみとりいとよりかけて白露を
玉にもぬける春の柳か

在原業平

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ
我身ひとつハもとの身にして

文屋康秀

吹からに秋の草木のしほるれハ
むへ山風を嵐といふらん

小野小町

思ひつゝぬれはや人のみえつらん
夢としりせハさめさらましを

大伴黒主

思ひ出て恋しき時ハ初雁の
鳴て渡ると人ハしらすや

喜撰法師

わか庵ハ都のたつみしかそすむ
世をうち山と人ハいふ也

一　二　三　四　五　ウ

歌仙香之記

一二五三四　二　月やいつぬる遊芝香の香分ぬ

四三一三五　二　家すむいつハりの身かし

名
一二二三四
四五一三五
一　涼み香り

名
一二三四五
五三一四三
二　月やいつぬし
秋香むかへし

全

右一説ノ時ハ一二三四五を三包宛ウ
を一炷りして左りぬくに時も何り　但

時分しみ大様紙三包七包にして
ウと入其家々仙ていふ時先　点のけ　かうちふ
まし　文二包にしも時折り去ふ何々ば
三家ハ絶頭よりいつれもゆるし
是六歌仙之香ニ包ハ歌仙香といふ
好三組可有　徒書炷の時薫かき
香て炷く書上
六歌仙香
一ヶ紙みとり　二ヶ月や何ヶ好　三ヶ折り
香ハ四ヶ吹ゟ流　あまかりひきして　六ヶ

色々へてらして 各六包充 内一包充伏シテ

出香之 右伏六包 都合して 出香六包

外ニ客二包ニテ 都合拾弐包 二筒

此一種 何ツかりハ みな一袋ニ出香之 都合南

八客之(?)二筒なれとも 客香之二ツ宛も中

急し二ツ所(?)聞わくへし

六歌仙香

香六種 一 二 三 四 又 各七包充 伏かし ウ 一包

右何も始のごとく 聞分かけ始

六種何ツかりハ一筒とし 何ツ何ツ始何

れハ 当り中ニ 縁(?)ツれハ何ツ何ツ

左を聞ツてし 客始と 一筒ツ 争シ

如花

たらちねハかゝれとてしも むはたまの 僧正遍昭

我くろかみをなてすや有けん

おほかたハ月をもめてし 是そこの 人

つもれハ人の老となるもの 在原業平

草も木も色かはれとも わたつうみの

浪の花にそ 秋なかりける 文屋康秀

色みえてうつろふものハ世の中の人の心の

花にそありける 小野小町

かゝみ山いさ立よりて見てゆかん年へぬる

身ハ老やしぬると 大伴黒主

右之香又ハ一円引を以ても右
等之茶以外何ゝ敷事ともあり

○新版名所香　廿九

香五種

一 新版として二包 内一包試
同 龜尾として 右同 同断
同 小塩として 右同 同断
同 住吉として 右同 同断
同 更級として 一包 無試

右試香終りて出香五包打交出
之〳〵し 試と合札を打交記紙へ
もつれの紋如此札一人前五枚十
人前十枚ツヽ 札表 如常
裏 梅 桜 橘 菊 月
札打也
新版と出ハ梅の札打へし 龜尾と
出ハ桜の札打へし 小塩と出ハ橘
の札打へし 住吉と出ハ菊の札打
へし 更級と出ハ月の札打へし

雑段 摩 任吉
満 五級
雑段名不書之
満 五級 任吉 雑段 名摩

札名 月 菊 梅 橋 櫻
札〃 橘 月 菊 梅 櫻
札〃 櫻 櫻 梅 月 菊

○玉川香　三十

香六種
一萩として二包 内一包試
二調布として二包 〃
三千鳥として二包 〃
四山吹として二包 〃
五卯花として二包 〃
六玉川として一包 試なし

右各香紙に其の名を記して打
交後にて先を試出しとさせとと
せし札を記して札を記して札を出
出し候て名を定し香六種の内
五種一種宛出香一種宛五包
玉川の香一種を交打交へ六包焼出

又しけぬきに添ての出来
又は書付様にて何々と字玉川
又何様にて何々と字にて名所
其外出所者ニ又有之是十
も名不出花
近江萩　武蔵調布　陸奥千鳥
山城欵冬　摂津卯花　紀伊玉川
右紀伊ハ名所不出し　如此書
流ていゝの字多きゆ紙
起こして紀伊の紙ニ　ニ玉との

歌云　如左
近江　明日も來ん野路の玉川萩こえて
　　色なる波に月やとりける
武蔵　玉川にさらす調布さら〳〵に
　　むかしの人のこひしきやなし
陸奥　夕されハ汐風こしてみちのくの
　　野田の玉川千鳥なくなり
山城　駒とめて猶水かハん山吹の
　　花の露そふ井手の玉川
摂津　見渡せハ波のしからみかけてけり
　　卯花咲る玉川のさと
紀伊　わすれても汲やしつらん旅人の
　　高野の奥の玉川の水
右六玉川ハ右の所ハ名所の歌也

玉川の分ハ二首宛して玉ゝの名ハ
人数ニ出し探題にてよし

玉川香之記

調布 香 山吹
萩 卯花 玉川

名 近江 三 萩 六玉川 一
名 摂津 四 卯花 六玉川 叶
名 陸奥 三 香 六玉川 一

月 日

又右ハ皆ニ六色ニ而記録ニ写し

諸ゝの分も記録ニ写し候ても
点かゝる但点法別ニあり而季のも
の記録とし点二ツなり但シ試ハ此る
なりたる人ハ其ハ弁点と申也
又津の玉川ハ聞かハ地田なり
調布ハ雑にして何にても一点なり
玉川ハ毒水之故ニ試なし若ニ分
時ハ星付る一人宛ハ六ツ二人合
三星之又一人ゑ三星二人ゑ一星
宛之点ハ一ツ之如し

新玉川香記
井手 卯花 清水 千鳥 露 菖
名 萩 調布 卯花 山吹 千鳥 玉川 点二
名 山吹 調布 卯花 玉川 萩 千鳥 星一
名 千鳥 玉川 萩 卯花 山吹 調布 全
月日
始の組と六玉川といひし十組ハ新
玉川とハ後とも一組也

○二見香 廿一
香三種
一香 三包ニ認 試
二香 三包ニ認 試
ウ香 二包ニ認 一試
右始ニ一二包二三包ニ客一包合人
本包打交〆次ニ一二客三包如此する
と一包除き二包〆此内ニ客加へする
かなにて紙分て 記第ニ出香出た
始の本種ハ記ニ出香紙記後の二

毛ハ先ニ出香致候ハ三式十炷
香の様ニ聞へし　依而始ハ上ニ一二聞
の文字を出し下ニハ右の名目夕月読出
段二種ハ上ニ二見と出し下ニ二色一二ウ
の文字を書へし　出香の形ハ一首の
歌ゟ出始ル文字ハ其一五字の書
可し　但始ル文字ハ香の種也
ル文字ゟ書ルなへし　此の二色ハ二種
也へ二見の二字ゟ書へし
全の人ニハ其文字ニ合　夕月読にも

一　点てんかくる事常のハ一二の文字ニ
計点字二種出す時ハ二種とも何れ
ハ点てん二見ニかくる也始後の事ニ
ても其一種の時ハ一点ツゝ点かし
組合ニ一点二見ニ一点二点之事ハ
記録の而ニて左の如し

一
二
一

二見香之記

二二ウ一二
いふほくよるかつらなきむかしけ
ウ二
二見のうらハ的てこそみえる

名乗　一ウ二三ウ一つゝ二見　ウ二　全
名乗　三二一ウ一つゝ三見　ウ一　一
名乗　一二三ウ二一つゝ二見　一　二　二

○陸奥名所香　廿二

香三種
一種ハ松嶋として三包ニ認　内一包試ス
同　塩竈として　同断　同
同　小松として　一包ニ認　無試

右試香二種終りて出香ハ四包
也　内二包ハ客なり　記紙ニ書付
出候　古法札之札の式如花札　一人ニ
六枚宛十人前六十枚之表常の如く
裏松嶋一枚　塩竈一枚　月　同　雄嶋　同
籬嶋　同　烟　同
松嶋と塩竈と客ハ　烟の札出すへし
塩竈と松嶋とハ　月の札出すへし
松嶋と小松と客ハ　雄嶋の札出すへし
塩竈と小松と客ハ　籬嶋の札出すへし
二種とも松嶋ハ　松嶋の札出すへし

同 塩竈ハ　　塩釜の札出し
松島塩竈の間三里ばかり海上の島
小嶋多し 風景筆に尽しがたし 松島
つくハ雄島塩竈これハ籬島之は京
色と並びて眺望ある面へ宮香浦小
升といふ又陸奥の名所なり札の表
出るし裏ハ右の名所を用ゆる也
札の表文字
信夫文字摺　　名古曽の関
野田の玉川　　袖のわたり
緒絶の橋　　奥の井

宮城萱刈　　末の松山
瀬々のむもれ木　　十符の菅菰
武隈の中川　　壷の石碑
籬ヶ山　　松かうら島
阿さかの沼　　不忘の路
右十六札諸余りあるといへとも俗揚名
不残々右ノ内ゟ撰ひ入合て用
札の時ハ何れ先を紀紙にて書も
記紙にて右ノ毎ノ名所にて記添ハ
可然哉 名所を出す 絵は時宜
かよひて名所 前立ちて前若衆角

一 証の香ニよりて尚記の通り
て考

陸奥名所香記　香銘

松嶋　出家

名 信夫文字摺　乱

名 阿武隈川　雁

名 十符の菅薦　月

名 名古曽の関　松嶋

名 松か浦嶋　雛鶯

名 野田玉川　千鳥

右名所文字多句ハ如斯名合
出し　又文字少キ句ハ少キ計
名合せし　但先ニ附置ふるへし

○ 結花月香　廿三

香二種

一 種ハ花として三包ニ認　内一包試

一 種ハ月として　右同　断

右試の香焚て　出香四包打交
内より二包抜　二包斗ニ成り焚継

て名乗紙に前出せし花月のお
坂無月と出れハ順と云月花と
出れハ逆と云之花にハ花と云月に
ハ月と云右花紙に附く札それ当
時ハ札の次第ハ常のことし　書ハ
左のことし
始花ニて後月と当ハ　嵐　順の札
同月　同花と当ハ　嵐　逆の札
花に　当ハ　花の札
月に　当ハ　月の札
右札裏文字之一人当ル段花十人

前之札枚より記録左のことし
花｜
月｜
聞花月香紀
花　月
名　嵐　順
名　月
名　嵐　逆

○ウ客香　卅四

香四種
一種ニ付一ツして三包ツヽ總内一包試

一種ハ二包にして二包ハ試 一包試
一 ウとして二包ハ試 試なし
一 客として一 なし
右試終りて出香八包ニ打交焼
出候試ニ合札ニテ手記録ハ名乗ニテ
記之 一 此組香ハ正傍の点ニ不
及 自然たとへハ出香ウウと聞ると
聞ても正の点にて客客と聞るとウ
ウと聞ウ一正なり ウウと聞客客
と聞も正点にて ウと客ウ ウと聞て
も客とウ ウ 客と聞ても先傍の点也

然ハ一ト客 此傍の点ハ一二の香也のけ
ウ客の傍ヘウ客ト 又ハ聞ハ二と
何でされても傍点かくる也

一一
二一 ウ一
客一

ウ客 香之記

客二 ウ二 一一 ウ客
名乗 ウ二 客二 一一 客ウ 悉皆 正点八
名乗 ウ二 ウ二 一一 傍傍 正点 四 傍点 四
名乗 ウ一 傍 ウ二 客一二 傍 二

月 日

元此組ハ客ノ字ヲ二ツ割 客香也二ツ

ましてウ客香と云趣向也と順く語り
出してウ客といへり古名はかく香と
きこえし

○杜律香　卅五

香六種

杜子美　二種　内一包試ス

張氏　一種　無試

扨香四種を一二三ウなり内一
二三試にて出香二包にて組合て
四包ならり内一組にて残り一組合ハ

次のとほし

一と二と　二と三と　ウと三と

一とウと

試終りて右杜子美張氏の二種を
一種宛包みにしてたき二包を
香一組にまぜて焼終りて又二種内
翻り香を一種宛しめて焼する
其後此何と無試有試を焼
する数又右四包にて此前にて
相分が外一包りきりてきくと記録
此仕舞めと同香を焼為て本式の四包

て詩の一句ごと寄附したるなり

一二八　春山無伴獨相求（シユンサンナフメトモ　ヒトリアヒモトム）
伐木丁〻山更幽（ハツボクタウ〳〵ヤマサラニカスカニ）

二三八　澗道餘寒歷氷雪（カントウノヨカンニヘヒヤウセツ）
石門斜日到林丘（セキモンノシヤシツニイタルリンキウ）

ウ三八　不貪夜識金銀氣（ムサボラスヨルシリキンギンキ）
遠害朝看麋鹿遊（トウサケテアシタミルビロクアソヒ）

一ウ八　乘興杳然迷出處（ジヤウキヤウヤウゼントシテマヨフシヨシヨ）
對君疑是泛虛舟（タイメキミニウタカフラクハコレウカフキヨシウニ）

右杜律第一の詩をとりて香附ス
故ニ杜律の名目と成記右の如し

杜律香之記

杜子美　一二　二三　一ウ　ウ三　張氏　春山——

名　杜子美　一二　二三　一ウ　ウ三　張氏　乘興——　十

名　張氏　一二　ウ三　二三　一ウ　杜子美　春山——　四

名　張氏　一二　二三　一ウ　ウ三　杜子美　澗道——　八

右記録順組立し香廿二種内ゟ
香十六種なり識ともに

○三種加客香　卅六

香四種

一一包　二二包　一三包　客一包

右何も無試也

右打交て焼出し記紙に試て
以て焼一ツ打紙に一ヶ出し二ツ目
より紙に二ヶ出し三ツ目より紙に三ヶ出し
客香ありしをウと書出し無試十
焼て一を二包二を一包三包抜ウ
三を増するなり

一｜
二｜
三｜
ウ｜｜

三種加客香之記

ウ二ウ三一二三ウウ三

名　一二三三ウウウ三三ウ

名　ウ二｜ウ｜三｜一｜二｜三｜ウ｜ウ｜三｜　十

名　ウ｜二｜ウ｜三｜一｜二｜ウウ｜三三｜　八

○扇争香　卅七

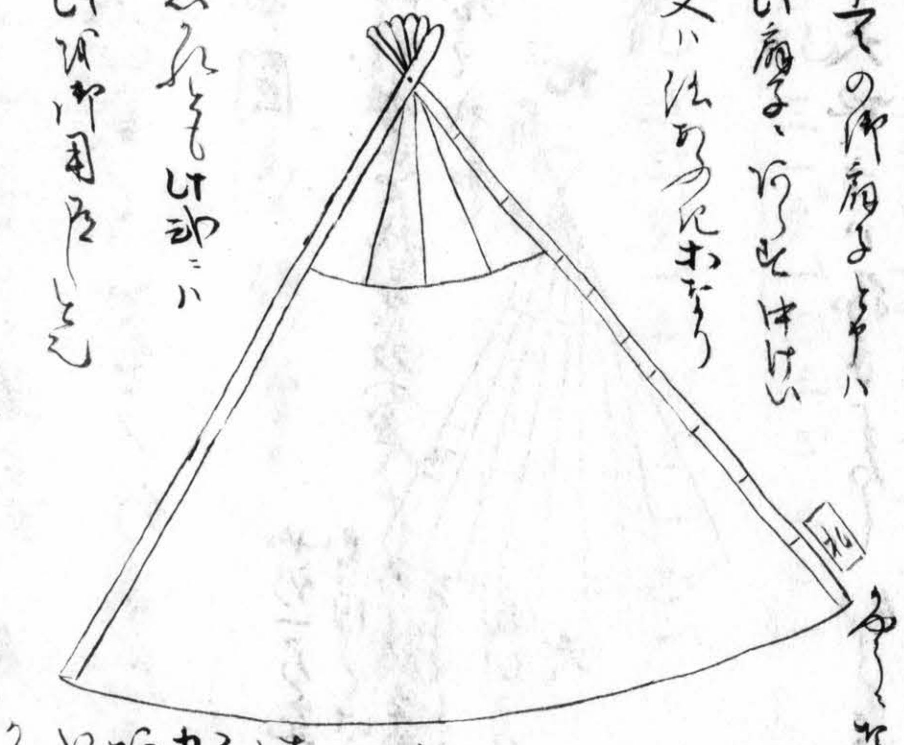
香四種

一二三四包　内一包試有

客一包　無試　右試十種香ニ同し

右一二三試香終りて出香十包ず
夫て姫出し試に合わせよへし但し一姫
聞に当りたりとも是を先後の人
数かと扇子をとりつき證の品に及
要のことむをなして如常なし
十のうちしかけて和にかまりる
あれか證く こをえて当り座
して一定先後かおめに当りる
人に扇子をえ数当り 二百一人
出る常れ一人出 二百之十と

右出人にそうするの要印対して当りといふ
秀句之神に 率に五ケ扇子十本祝たるに
出せて出はへし
上での御扇子とかハ
以扇子にかりを付けい
又ハ法ありたるなり

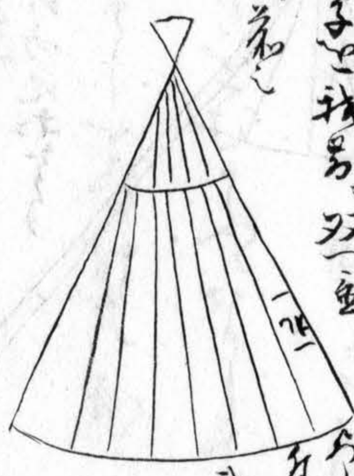


用いはんへ重
要し

志れとも此頃には
此頃御用達しとぞ

此かさ
かく扇子の
切りきと
いふへし
子細の
様を御る
以しかりて

又ハ一ツの時ハ右の札ヲ扇子の内へ
入置くときハ人紛らす為也
如図



如此扇子を我前ニ双へ置
地ハ我前也

如此一方開き見せ
置ニ開く時ハ右手ニ而
おしく扇子ニ入ル

天地ニテハ猶手ニ而如之 かけて
天地ニ見るへし

一 二 三 ウ

扇子争香之記

二三ウ一一二三一三一
名札 三一ヴ一三三三二二一
花札 二ヴヴ一三ヴ三一ヴ三一

月 日

一 程記しき出し点ふ入なり 猶多し者
見るへき 個ニ 筆士

当組花葉之日組ニこれハ亭主か
扇子を唯一本出して是ニ記録を
書へし　組々の時ハ持参の扇を又
子双へ返而一組物されハ三本有へし
人のかたへうちもとへし　別ニ扇ニ余
返出而後なるも出来つて札数
多き程せし　全の人ハ十枚之一
組記之之紙って一所ニ記録之字
丈へし　此出様ハ本書ニ合一所ニ
出来るゆへ　前後を不違文字を合て

書くもよし　扇ハ其家扇ニ而ハ
猶乍不入よし　唯一組記ニ出之
右記録扇子ニ書す　扇有之く
扇とのけ出へし　人数多き時扇
子の表　あまりハ文裏へのへし
無メ月日　手形ハ是非裏へ書して
よし　尚記の面ニて可考

扇子の記録の図

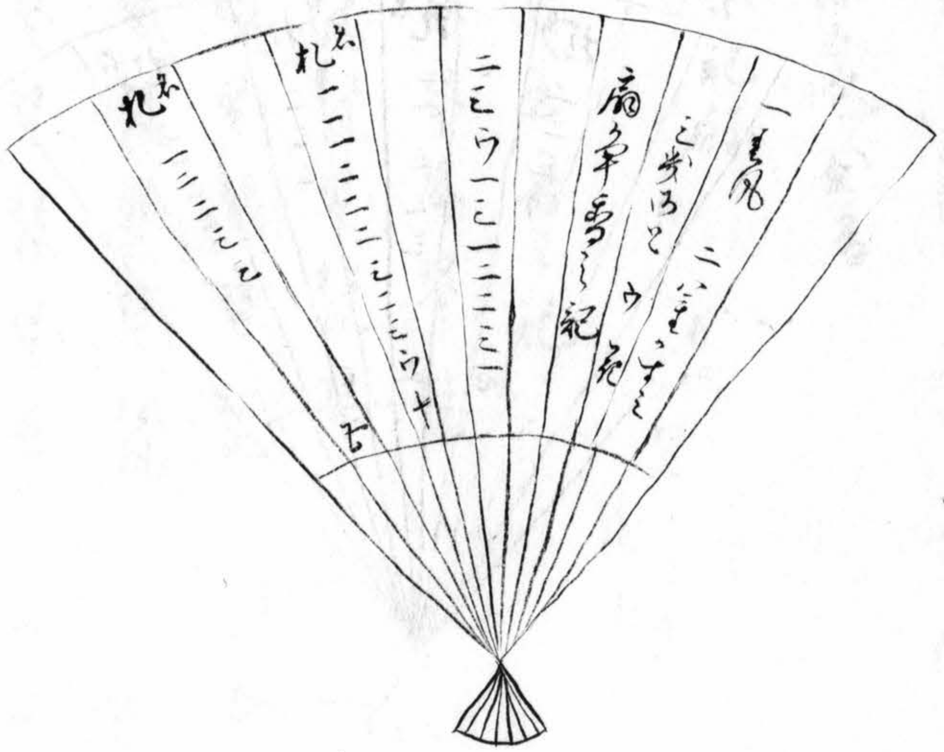
如形一骨のけて
書へし此時ハ三骨へ
書して出之れ
尤人数も多き
時ハ此通ニして

図絵も見へし尚
能く工夫有へし

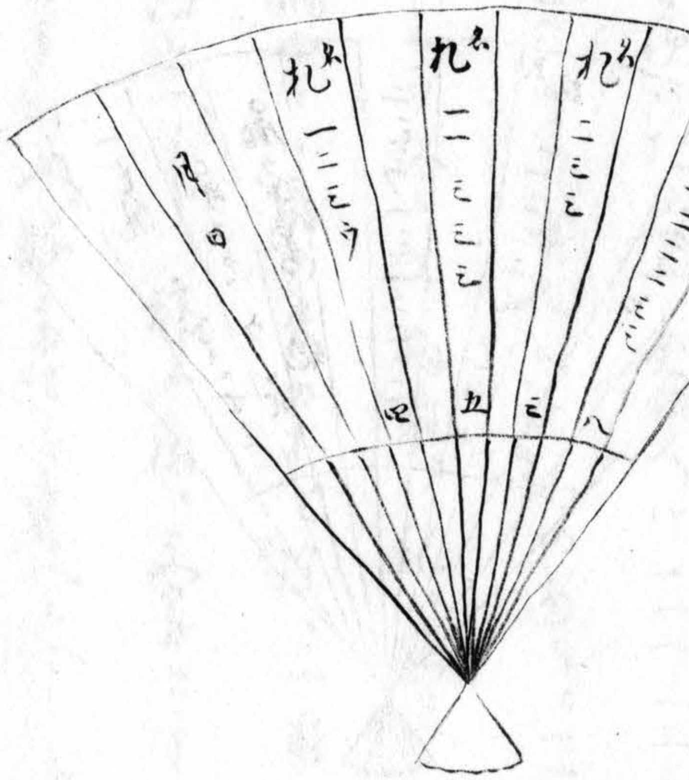
此香ハたとへハ　全の人ハ一一一二二三
三三三ウト来又六七杯の香りて二
二三三ウ杯ト云　尚奥ノ記ニ委しく
記調やうハ扇の骨の外を除き一同
記内云へし　都而扇ニ文字ニ至
の古実之人数多ても書へかし云
時ハ常の一枚紙の記ろくかこれく来
なく右記録杯ニ用ゆる常の扇
をのハあり此扇にて又く蝙蝠の類を

認ニすかくゆる也へなりて右記
ろくニ用ゆる扇ハ誂やう外も文字
の都合ニ不拘様ニ第て調ルへし

記録
扇の
表の
図



記録
扇の
表の
図



○琴玉香　　十八

琴　松風　試アリ　試とも以上

十二包ゝ各包にて交て十包之内各

包際各包出香

小記録

香組
琴ゝ
松風ゝ

琴玉香之記

琴　琴　琴　琴　松風

何某　松風　松風　琴　松風　琴　一

同　琴　琴　琴　琴　松風　全

同　琴　松風　琴　琴　松風　四

同　琴　琴　松風　琴　琴　三

○住吉香

香組　一二三三包宛ウ香一包
右何も無試　無試十炷香の如く
組て先始に一二三を三包除きて
跡六包にウ香を交へて七包打
交て炷出すへし　一二三の札を
抜除き残り札二枚宛まて渡
焚様無試十炷香の如し　初七包
焚済して跡一二三三包の内打
交て一包出す聞ちらしの香也

ちらへて札打へし　初の香ハ出香
を後れを先とす　前後の香ハ出香
を先に前紀ての後を後に記すへし
香所以ハ打当りたる人ハ点の一香
を出し打当る人ハ一二三文字を出
清の人ハ点一箇付書　初香に
点打く後の一炷ハ点なし点た
れこそ

我みても久しく成ぬ住吉の
きしの姫松いく代経ぬらん

初香と後の一札と合ハ我らても上云
二の香と後の一程と合ハすゑよしの云
一の香　三程通り　日　久しく聞ゆ云
二の香　右同　日　雁の渡ル上云
三の香　右同　日　幾代ゆるん云
右いつれも前後二程合客の云
文字をと云　文三程の通りにハ七文
字残云と心得へし　右記面香
之香

組香　香之記
一ウ二三一三二一
名 玉椿　一三三二一ウ三
名 白梅　一二三ウ一ウ三
名 老松　一二三ウ一二三
名 呉竹　一二一三二三ウ
月　日
右此組香ハ後西院様御時御
興行有之由　家本ニ有組香
香三十組之内ニ二組之　又和習

組香有

○三千年香

香　五種

一ノ香　一包　試香なし

二ノ香　二包　同

三ノ香　三包　同

四ノ香　四包　同

五ノ香　五包　同

右一二三四五　以上　十五包打交焚

出香各一炷　試香なしに焚て
十五種十炷香のごとくに記録せよ
其外焚へし　記録認様ハ本香を
焚て記して　記ろくに書し　無
試の時ハ名目を本香に焚て　無試
の様に聞て　点をつけ　不当ハ不点
又試の時ハ下に　一二三四五の句
会て　試の五文字　七文字　二行
ハ試を云也　一ノ香　拾列　二分ある点の
香ハ一種も不当ハ　一柱香ハ一句も云

色々は其字不残用て次第あり
と謂ふへし全の人は前句を云
これ下に全と云ことは前句後下
格を云し一句とは継は右の為経
付たる一種違へは一句たるを
字をきてに比す右件の中に前
の句は付ても其儀を用也
小前の一首云但歌し其てまりて上
の一二三四五を二行て志てあき
其二行志ての下五は十五経也

此ハ右香ニ記 一種二種ニ而も
点遍へしたニへ一ノ香ハ一種香れ
ハ桜ハ三四五ケ勝 有ゆへなる為
記るくの面まて 能く考へし
せ香ハ
三ウ之葉ニ香る桃のはなより
花咲きにあかぬ
此香を一の香を三ウ年にてし
二つめる香もて三つはなして
四ツ目咲き王 香り遍て嗅しとて

一 香銘 三し
二し 四し
五し

三ウ年香記

五 三 四 四 三 五 四 五 三ウ之葉ニ香る桃のはなより
一 二 三 四 五 二 二 花咲きにあかぬ嗅しき

人名 札銘 大 三 四 四 三 ウ 四 ウ 三ウ之葉ニ香る桃のはなより 一首全
一 ウ 三 四 ウ 二 二 花咲きにあかぬ嗅しき

人名 札銘 二 三 四 四 ウ ウ ウ ウ 三ウ之葉 一百十
一 三 三 二 ウ 二 四

人名 札銘 ウ 三 四 四 三 四 ウ ウ 三ウ之葉ニ香る桃のはなより 二百十
一 ウ 三 四 ウ 二 二

人名 札銘 四 三 ウ ウ 三 四 二 二 三ウ之葉 はなより 二百六
ウ 三 四 三 ウ ウ

人名 札銘 ウ 二 三 四 四 ウ 三 ウ 三ウ之葉 あかぬ嗅しき 二百七
ウ 四 二 ウ 三 四

月 日

此外之分合一ツ宛之出有香銘
ともかく出しも一表遣ハさいへとも近来
不用ニ付組合略之

四季二十組目録　内之組同出香　合廿二組なり

春之部
子日香　梅花香　梅烟香
若草香　桜香

夏之部
卯花香　五月香　郭公香　二出
山路香　蛍火香　二出

秋之部
千種香　女郎花香　月見香
若月香　重月香　勝負香
菊合香　龍田香

冬之部
時雨香　二出　落葉香

名所恋雑祝二十組目録　内七組同出香　合廿七組なり

名所之部
宇治山名所香　難波名所香
玉川香　二見香
陸奥名所香

恋之部
源氏末摘花香　乙女香

空蝉香　　四季歌合香 二

松風香

雑之部

六歌仙香 二炷　　[illegible]花月香

字寄香　　杜律香

三種加茗香 二炷　　扇争香 二炷

琴画香　　五方香

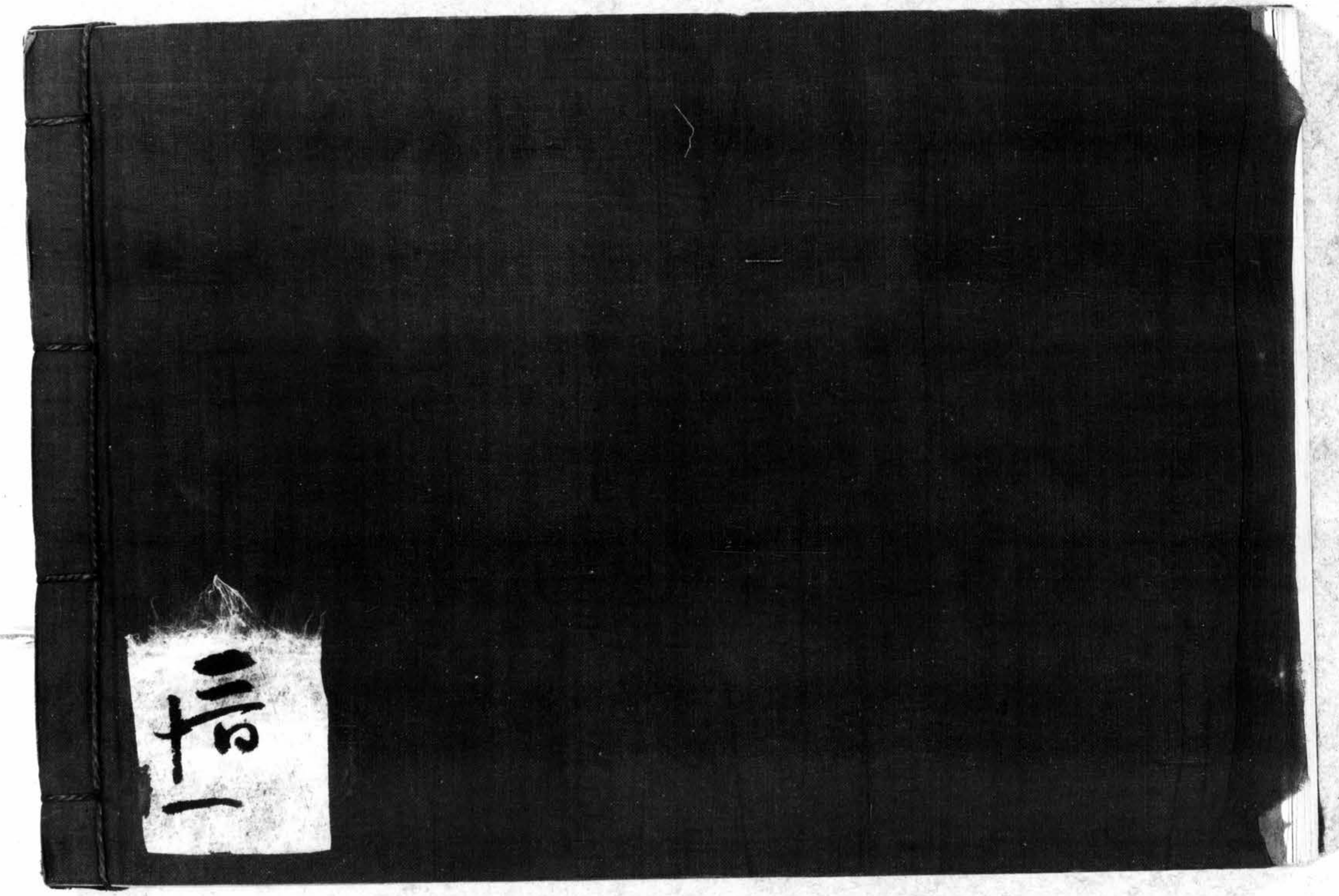
祝之部

住吉香 二炷　　三千年香 二炷

右有篠光斎宗先四畳改正五十
組ノ内二十炷香ヲ除キ 畢組始ハ
五十組 今五十組ニ呼ハ新撰五十
組ト呼フ名目違ニ有之

右志野流四十組
聞香之書先師蜂谷
家如古傳無一毫
之差往書写取呈上
也

不滞園
正誠


三十一